大念佛

No.74
発行／融通念佛宗
総本山 大念佛寺
大阪市平野区平野上町1-7-26
TEL.06-6791-0026
題字：融通念佛宗 管長 倍巌良舜

青空にはためく仏旗（於 大念佛寺）

融通念佛宗管長 倍巌良舜

平成二十八年の新春おめでとうございます。昨年は開宗九百年記念・大通上人三百回御遠忌にあたり、五月の万部法要と共に御遠忌大法要が厳修されました。天候にも恵まれ多勢のご参詣をいただいて無事満行を迎えることができました。

これひとえに神仏の御加護と融通念佛宗全寺院、全檀信徒の総力結集のたまものであり、いまでも感謝、感動の余韻が伝わって参ります。

また御遠忌は一過性ではなく、次の躍動へのステップであり、新たなる出発点であります。

さて、今の日本は比較的平和で文明度も高い国だと思います。メディアによると自動車も近い将来、文字通り自動運転になるそうで驚いています。科学の発展は日進月歩で豊かな生活のためには望ましいことですが、心配な面もあるのです。例えば軍需産業がどんどん発展して大量殺人、大量破壊兵器が更にふくらむことなどです。

しかし、一面から考えると科学にも限界があります。どんなに立派な実験室でも「生命」を生みだすことはできません。ごく単純な微生物でもつくることができないのです。地球上で生命の誕生は全く不思議なことです。大きい方では宇宙も今のところハッブル宇宙望遠鏡で観察できる範囲で、それもダークエネルギー、ダークマターなど、わからないことといっぱいのようです。そのほか「時間」とは何ぞやとか、人間の知能の領域外のことが沢山あります。

「生命」が分からないのですから「死」も分からないのがあたりまえです。

私は今年九十四歳を迎えます。大正・昭和・平成と時は流れました。順風ばかりではなく戦争という大逆風に会い、学生の途中で学徒出陣という名で二年近く軍人でありました。「お前達の命は鴻毛（鳥の毛）よりも軽い。死を恐れるな。」と叩き込まれました。日本の敗北で終戦となり、今度は戦後の貧乏時代が数年続きました。その後も何回となく病気入退院、数回の大きな手術を経験し今日に至っています。

寿命の不思議を感じています。目に見える世界でも目に見えない世界でも、分からないことがいっぱいあるのです。分からないということが分かってきました。

物事の本質を探究するのが哲学で、信じるのが宗教です。仏教では「真如」という本質を説いています。また「真如縁起」といって、物事はすべて相依り、相関して起ると考えます。融通念仏は念仏をもととして相依り相関する世界であります。

本年も皆様にとってよい年であることをお祈り致します。

在家伝法について(一)

融通念佛宗宗務総長　吉村暲英

はじめに

伝法というのは、厳粛な宗教的儀式・作法によって、宗門の教義の真髄を伝授することをいいます。これに二通りがあり、一つは僧侶を対象にしたものと、いま一つは在俗の信者を対象にしたものとに分かれます。

僧侶の伝法には法脈と宗脈とがあります。

在俗の信者に付与相伝するものを在家伝法といいます。今回は在家伝法のことを中心に話を進めます。わが宗では“伝法”といえば、在家伝法を指すのが一般的になっています。

普通、“伝法”といえば、入行から満行までの通常、五日間の修行期間全体を指しています。すなわち法要全体を総括した名称になっています。しかし厳密には伝法とは、この法要の最終日に「道場」と呼ばれる特別の荘厳（飾りつけ）を施した修法の場で、伝統の儀式に則り法門を伝授すること、この一事を伝法というのです。これを通常の“伝法”と区別するため、「正伝法」と呼びます。

ところで伝法にはこの正伝法とともに、もう一つの大切な柱があります。それは「受戒」といわれるもので、出家・在家の別なく、仏の教えを奉ずる者が守らなければならない規律に従うことを誓う儀式のことです。

受戒と正伝法――この二本の柱こそ、伝法修行の根幹といえるでしょう。この受戒作法も正伝法と同様、厳粛な道場の内で、古式に則り伝授されます。戒（戒律）は悪を止め、善を修することを目的とします。戒を受け、それを守ろうと努力することにより、人はこの人生を誤りなく歩むことができるのです。

加行

それでは、受戒と正伝法以外のいろいろな行法は何かということになりますが、それを“加行”というのです。加行とは受戒・正伝法の際に、その前段階として行われる修行のことです。

伝法の加行として、水行、勤行（読経、おつとめ）、礼拝行、日課念仏など、毎日の定められた行法とともに、七重式といって、無常の世に確かなお念仏のよるべをもつこと、三宝（仏・法・僧）供養のあり方と心がまえ、数珠の持ち方、合掌の意味合いなど、日替わりで七項目にわたって仏事を習得することが課せられます。七重式については後日述べるとして、今はただ何故、受戒・正伝法の際、加行が必要なのかということを考えていただきたいのです。それは一口でいえば、確たる信心を養うためといえるでしょう。もし加行がなければ堅固な信心を得ることができないからです。耕やさない土に植物の種を植え付けても果実が得られないのと同じです。受戒も正伝法も形だけの無意味なものになってしまいます。篤い信心の土壌があってこそ実を結ぶことができるのです。

血脈

仏教では師資相承といって、師僧から弟子へと伝統的に教えの中枢を伝えていくことを重視します。融通念佛宗では、宗祖良忍上人が洛北大原でご修行中、阿弥陀仏から直接、融通念仏の法門を授かり、良忍上人から代々の上人に伝わり、さらにそこから各末寺の住職に伝えられ、そして伝法行人に伝わっていくのです。それはあたかも親から子へ、子から孫へと血が連なっていくのにたとえて、“血脈”といいます。すなわち在家伝法の行人は仏さま（阿弥陀仏）と歴代の祖師がたと導師である住職と、法の血によって一つにつながっているのです。これが仏祖妙法の血脈といいます。

受戒にも血脈があります。それは良忍上人に伝わるまでに、戒律の経典である『梵網経』の教主、盧舎那仏から釈迦如来へ、次にはインド、中国、日本の三国に伝来した祖師がたがおられます。さきほど同様、伝法行人は戒律の血脈においても、法の血によってつながっているのです。

在家伝法の起源

仏門に帰依（絶対の信をささげ、よりどころとすること）する者は必ず受戒・伝法を相伝することは、専門の僧侶には欠かすことのできない義務でもあります。しかし大通上人以前にはそのことを知る資料が発見されていません。幸い宝永七年（一七一〇）大通上人六十二歳のとき、嗣法の弟子、忍通上人のために書き置かれた伝法要儀（法脈）があり、今日に至るまで、僧侶伝法の亀鑑となってきました。しかしそれは僧侶に限っており、いまだ在家の信者に適用されたものではありませんでした。

在家伝法の始まりについては確たる資料に乏しく、わずかに江戸時代後期の学僧、詮海上人による『宗内在家伝法濫觴』（濫觴は起源のこと）と記した一文があり、それによると本山の阿弥陀堂（元禄五年、大通上人建立。明治三十一年焼失）に於いて、龍海上人が始められたとあります。

龍海上人はもと豊山（長谷寺）の修行僧でしたが、本宗に帰依して大和荒蒔誠福寺に住し、大通上人が和州巡行の際、はじめて上人に拝謁しました。大通上人は帰山後、龍海上人と檀家総代を呼び、香衣許可の願いを寺社奉行に斡旋し、のち本山の貞松院（役職の一つで宗務の最高権威者）に抜てきされたとあります。大通上人は初対面のときから龍海の才能を見抜き、将来を嘱望されたのでしょう。

龍海上人は、大通、忍通、信海と三代にわたって貞松院を勤めましたが、信海上人在世中の享保十八年（一七三三）に亡くなりました。大通上人は正徳六年（享保元年、一七一六）にお亡くなりになりましたので、その年から享保十八年までの十七年間に、はじめて在家伝法を本山の阿弥陀堂で修行されたということになります。貞松院という役職上、これを修行するのに何ら支障はなかったことでしょう。

つまり大通上人没後まもなく、師の付嘱を受けた龍海上人が広く在家の信者に融通の法門を開いたということは、特筆すべきことであります。それ以後、約三百年、本宗の法燈が輝き続けていることは喜びに堪えないところであります。

『全日本仏教青年会 全国大会 in 沖縄
「終戦七十年を迎え、つなぐ世界平和への願い」に参加して』

融通念佛宗青年会　伊藤宗純

融通念佛宗青年会の皆様

去る平成二十七年六月二十二日～二十三日に全日本仏教青年会主催の全国大会が沖縄県那覇市周辺にて開催されました。全国より百五十名を超える青年僧が参加し、融通念佛宗青年会からも六名が参加致しました。六月二十三日が沖縄戦終結を記念した「沖縄慰霊の日」であり、今年が終戦七十年の年でもあった為に今大会は世界平和祈念の願いも込め沖縄県での開催となりました。

この全国大会は全日本仏教青年会に加盟する九つの各宗派青年会と四つの地域仏教青年会の全十三団体が、互いの結束と活動等を広く社会に発信する目的で二年に一度全国各地で開催されているものです。（平成二十五年度は大阪府、平成二十三年度は東京都にて開催されました。）

六月二十二日は那覇市内のホテルでの開会式に続き、沖縄戦語り部の照屋盛行氏による「沖縄戦を学ぶ」と題した講演が行われました。実際に体験した沖縄戦と現在の沖縄が直面している経済問題・基地問題について貴重なお話を聞くことが出来ました。その後、追悼・平和祈願法要を地元沖縄の方々を含む参加者全員で執り行いました。

沖縄を宗教の観点から知る為に大正大学講師 佐藤壮広氏による「沖縄固有の宗教を知る」と題した講演や、世界三大宗教である仏教・キリスト教・イスラム教からそれぞれ、財団法人東方研究所の奈良修一師、バチカン諸宗教対話評議会次長のフェリックス・マチャード大司教、日本ムスリム協会名誉会長で早稲田大学イスラム科学研究所の樋口美作師をお招きして、諸宗教対話とパネルディスカッションも開催されました。この諸宗教対話の中で宗教対話の重要性と広島・長崎と共に、沖縄こそ「戦争を繰り返してはならない」地であるとの思いから、平和への道筋を青年僧と共に模索し、広く社会に発信していく事を参加者全員で誓いました。

翌六月二十三日は、沖縄戦終結「沖縄慰霊の日」に合わせ、戦争への反省とともに平和への祈りを胸に戦没者への追悼の誠を表わす為、慰霊行脚（平和行進）が行われました。沖縄の炎天下を避ける為、早朝五時より那覇市から隣接する沖縄戦の激戦地であった糸満市へ移動し、七時より糸満ローターリーから各宗派それぞれのお念仏をお唱えしながら行脚を開始致しました。当日は平日でしたが、沖縄県内の学校・公共機関は全て休日扱いで、県内ほとんどの方が平和行事や追悼行事に参加されていました。国道三三一号線を行脚中も沿道からは合掌の姿で温かいお言葉をかけて頂いたり、地元の皆さんの好意で給水所を設けて頂いたりしました。またこの日は沖縄の六月の最高気温を記録する猛暑日で、朝九時の時点で三十度に達しました。沖縄の太陽はヂリヂリと黒衣ごしに肌を焦がし、沖縄特有の湿度を含んだ海風にも苦しめられましたが、七十年前のこの地で戦火に追われ、舗装もされていない荒れた同じこの道を傷ついた祖父母、幼い弟や妹の手を引き、背負い逃げ惑ったであろう方々の事を思いながら行脚させて頂きました。慰霊行脚は約五時間をかけ「ひめゆりの塔」を経て「黎明之塔」で読経回向をし、平和祈念公園での沖縄県主催の「戦後七十年沖縄全戦没者追悼式」にも参加し、正午の黙祷で参加者全員が恒久平和を願い解散となりました。

今回はじめて沖縄を訪れる機会をいただき、多くのことを感じ、学ぶことが出来ました。

実際に沖縄の空の下、戦争の痕跡を今なお色濃く遺す地で私たち戦争を知らない青年僧が肌身でその凄惨さを感じ、沖縄の方々のお話を聴く事が出来たという有難い仏縁を通して、戦没者の慰霊は僧侶として当然のことながら、私たち宗教者や青年僧こそが今、戦争を決して忘れず、二度と繰り返してはならないと誓い、次の世代に伝えていかなければならないと強く思いました。

今後も融通念佛宗青年会では二年後の全国大会をはじめ、東日本大震災追悼法要や災害ボランティアなどに多くの青年会員で参加・協力してまいりたいと考えております。

平成二十八年度 紫金職就任者 決まる

平成二十八年度の紫金職就任者は、第六教区　奈良県生駒郡三郷町勢野東二ー七ー六　勢谷寺住職　山崎良崇師に決定しました。

紫金職は、元祖忌、中祖忌、再興忌及び万部法要といった宗門にとって大事な法要行事において融通念佛宗　管長猊下の前座勤行式で導師を勤めます。任期は、毎年二月一日から翌年の一月末日までの一年間。住職の就任期間二十年以上などの資格条件を満たす事で選ばれますが、大きな法要行事の導師を勤めあげる心技体が必要となります。このように紫金職とは宗門を代表する、この上なく尊い重要な職務であります。

この度、紫金職に就任される山崎良崇師は、昭和三十七年二月四日に勢谷寺住職に就任、平成十四年から平成十八年には教区長を務め、また、今までに二回も当代導師として伝法を修行し、本堂新築や山門、庫裡の大改修など山門整備、檀信徒の教化に尽力し、現在に至られます。

子ども寺子屋念仏会
随行雑感
岩湧の冷気につつまれて

第九教区　稱名寺住職　徳田泰秀

それは、こうして始まりました。七月二十九日の昼下がり、熱暑のご本山境内をマイクロバスと乗用車数台に分乗して、小学生と中学生の約三十名が、河内長野市　岩湧山　岩湧寺に向けて一泊二日の修行に出発しました。

“父母の恩は山よりも高く海よりも深し”という訓があります。

今回の子ども寺子屋念仏会に、参加させてくださったご両親の大きなご恩のおかげを、子供たち一人ひとり強く心に刻んでほしいと思います。参加したくても、参加できなかった友だちがたくさんいるのに……です。みなさんのご両親にも同じように両親があり、また親があり……と、私たちの命は遥か遠い々昔のご先祖さまからズッーと「つながっている」ということです。その「つながり」が、一つでも切れていたら、今の自分がここに居ないのです。静まりかえった闇につつまれた本堂で、正面の阿弥陀如来さまのローソクの火を、次からつぎへとリレーしていったあの行は、まさに“命のつながり”を形にあらわした尊い修行だったのです。

「幼な児の次第次第に知恵つきて仏に遠くなるぞ悲しき」という道歌がありますが、都心を離れ、夏蝉も鳴かない冷気につつまれた岩湧山での一泊二日の貴重な修行で、仏さまのような人になる心の種まきを体験した子供たちは、決して“仏に遠くなるぞ悲しき人間にならない”と思いました。

融通念佛会と百万遍大数珠繰り

三斎月と呼ばれる一月、五月、九月の十六日に「融通念佛会」と「百万遍大数珠繰り」が総本山大念佛寺で行われます。

午前十一時、本堂の南隣にある瑞祥閣にて「融通念佛会」がまず始まります。最初に受付にて名前を記帳します。これは、古くは平安時代の鳥羽上皇から今に至るまで、名前を書いた人は、皆　念仏の輪で結ばれるという思想に基づいています。つまり九百年ぐらい前から続く融通念仏の輪に自分の名前を連ねる事となり、念仏を称える事を約束すると同時に念仏の功徳を時空を超えて与えて、与えられる事となります。

続いて勤行式が始まります。勤行式の最後に日課念仏を勤め、参加者全員でお念仏「南無阿弥陀仏」を百遍称えます。有難い念仏の唱和に身も心も清められ、仏心が目覚めるような気が満ちてきます。

勤行式が終わると宗務総長の法話があります。これもまた有難い色々なお話を聞く事ができ、心が豊かになり、暖かい気持ちに包まれます。

このあと午後一時からいよいよ「百万遍大数珠繰り」が本堂において始まります。本堂の四隅に張り巡らされたケヤキの大数珠が本堂外陣に降ろされます。ケヤキ材の数珠の玉は直径約六センチほど。ひとつづつに南無阿弥陀仏の文字が刻まれ、約一二〇〇個の数珠玉が連なります。ここで参加者は、外陣外側に向かって数珠の内側に

並んで座ります。管長猊下のお清めの洒水が終わりますと数珠繰りの開始です。大勢の参加者が数珠を繰りながら「南無阿弥陀仏」と念仏を称えます。数珠の一珠一珠が他のすべての人に行き渡るように、自分の称えた念仏が他のすべての人々に回り向く。つまり、自分の称えた念仏が他の人の功徳となり、自身にも他の人の念仏の功徳が回り向く。まさに融通念佛の原理が、この大数珠繰りで実践されるのです。

最後に管長猊下による御加持が行われ、希望者一人ひとりの身体堅固を祈願されます。このように融通念仏の教えを実践した有難い行事であり、最後の御加持により、身体堅固の御祈念も頂き、心身ともに穢れが落とされ、純真な仏心が芽生えてくるような感覚が得られます。このような有難い「融通念佛会」と「百万遍大数珠繰り」に是非お参り下さい。

大念佛寺 年中行事ご案内（一月～七月）

◎一月一日(金・祝)　午前五時
修正会
国家安泰・五穀豊穣・万民豊楽を祈願して法要が修されます。

◎一月十六日(土)　午前十一時
融通念仏会
ご一緒にお念仏を称えましょう。

◎一月十六日(土)　午後一時
百万遍会(大数珠くり)
外陣いっぱいに張りめぐらされた数珠を、お念仏の声もろともに繰ります。管長猊下から身体堅固のお加持が受けられます。

◎二月三日(水)　午前九時三十分
寒行
本山僧侶が平野の町を鉦を打ち鳴らしながら托鉢します。
毘沙門天護摩供　午前十時
大般若転読　午後二時

◎二月二十六日(金)　午後一時
元祖聖応大師　御忌法要

◎三月二日(水)　午前七時三十分
河内御回在御出光

◎三月五日(土)　午後一時
再興大通上人　御忌法要

◎三月三十一日(木)　午後一時三十分
写経奉納供養・筆供養

◎五月一日(日)～五日(木・祝)
万部法要

◎五月十六日(月)　午前十一時
融通念仏会

◎五月十六日(月)　午後一時
百万遍会(大数珠くり)

◎五月二十二日(日)
東照大権現忌

◎五月二十九日(日)　午後三時頃
河内御回在御帰院

◎七月七日(木)　午後一時
中祖法明上人　御忌法要

◎七月二十日(水)
鳥羽上皇忌

■毎月第二水曜日
午後二時～四時三十分
大念佛寺仏教講座

■毎月二十六日　午後一時三十分
定例布教

★写経のご案内
毎月二十六日、午前九時三十分より午後三時まで、白雲閣にて写経（一巻千円）を行っております。

★納骨のご案内
午前九時三十分より午後四時まで年中無休で宗派は問わず納骨を受け付けています。
尚、納骨の際は、事前にお問い合わせ下さい。

●日程については、変更になる時もございます。
●お問い合わせ
☎〇六―六七九一―〇〇二六

話せば心も軽くなる　大阪仏教テレホン相談室
仏事相談、信仰相談、その他あらゆる人生相談を十宗派の僧侶がお受けします。
（月曜日～金曜日　一月十一日～十二月二十四日（八月休）
でんわ　〇六（六二四五）五一一〇　午後二時～五時迄

謹賀新年
融通念佛宗総本山　大念佛寺
法主　倍巌　良舜
管長
宗務総長　吉村　暲英
教学部長　中江　慈光
庶務部長　岡田　眞澄
財務部長　北川　全宏